法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

『巴茶媽媽』創刊同人・宮本俊樹氏インタビュー

宮本，俊樹 / 川村，湊 / 守屋，貴嗣

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Bulletin of the Faculty of Intercultural Communication, Hosei University Ibunka
(巻 / Volume)
14
(開始ページ / Start Page)
15
(終了ページ / End Page)
31
(発行年 / Year)
2013-04
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008692

Hosei University Repository

『巴茶媽媽（パチャママ）』創刊同人・宮本俊樹氏インタビュー

聞き手：川村湊、守屋貴嗣

守屋：宮本さん、本日はお時間を作って頂き、ありがとうございます。我々は昨年、アルゼンチンのブエノスアイレスに日系・韓国系移民文学の調査に向かい、現地で『巴茶媽媽（パチャママ）』という日本語文芸同人誌に出会いました。それから昨年の調査旅行の帰国後、一度宮本さんとお会いし、『巴茶媽媽』全冊をお借りし、ようやく全てに目を通すことが出来た次第です。私も昨年、「アルゼンチン日本語文学論――『巴茶媽媽』について――」（『異文化』第13号、2012・3）という論文を書かせて頂きました。まずは、宮本さんがアルゼンチンに行こう、と決心なさったきっかけはどのようなことだったのでしょうか。

宮本：最初は音楽です。ブラジル音楽を聴いていてポルトガル語を理解したい、という気持ちが湧いてきました。そのうち、会社帰りに何度か立ち寄った店の女将さんからタダでスペイン語を教えてもらえることになり、スペイン語圏のことを知るうちに興味が湧いてきました。その女将さんの紹介でスペイン人やアルゼンチン人の友人が出来、だんだん南米に興味を持つようになりました。

守屋：宮本さんは北海道大学を卒業なさっていますね。大学生のときにはスペイン語やアルゼンチンとの出会いというのはなかったのでしょうか。

宮本：全く無かったですね。

守屋：宮本さんと同じく『巴茶媽媽』創刊同人の増山朗さんも北海道出身ですよね。北海道での増山さんとのつながりなどはなかったのでしょうか。

Hosei University Repository

宮本：私が大学生の時には何も無かったですね。アルゼンチンに行ってから増山さんの出身が北海道だと知りました。

守屋：アルゼンチンに渡ったのは、国際協力事業団による「海外開発青年」制度によるのですね。アルゼンチンを渡航先に選択した強い理由などございますか。

宮本：若かったからか、いろいろ当時は思う所があったと思います。国際協力事業団の「海外開発青年」制度があると知る前から、南米に行こう、とは決めていました。そのとき偶然、新聞で開発青年応募の記事を見て応募をしました。

守屋：応募は 1985 年ですね。これが第 1 回の「海外開発青年」の応募であったと思います。資料ではアルゼンチンには 5 名、開発青年として渡っていらっしゃいます。その中に宮本さんと一緒に『巴茶媽媽』創刊同人となる関口伸治氏もいらっしゃったのですね。アルゼンチンに渡ってから、文学的なお話をなさって『巴茶媽媽』を創刊しようという話になるのでしょうか。

宮本：関口さんと仲良くなったのは、研修中ですね。出発前に 1 ヶ月ほど、横浜で研修があったのですね。ほぼ合宿のような生活で、毎晩関口さんの部屋で夜中 1 時、2 時まで喋っていました。お互いに、本の話や旅行の話が好きだったので、いろいろ話しました。

守屋：関口さんもヨーロッパをまわった経験などお持ちのようですね。『巴茶媽媽』では「ポーランド幻想旅行」を連載なさっています。研修が終了し、アルゼンチンに渡ることになりますが、制度では何年間の移住という決まりだったのでしょうか。

宮本：3 年間です。3 年で契約が切れ、その後は現地に残るのも日本に帰国するのも自由、ということでした。

守屋：宮本さんはそこでアルゼンチンに残ることを選択された。

宮本：最初から、移住しようという考えでいました。皆そうでしたよ。まあ、結果として残った人数は少なかったですけど。「海外開発青年」

Hosei University Repository

という制度自体の目的は、すでに現地で暮らしている日系の移住者と若い日本人との接点を作るというものです。私の仕事は、アルゼンチンの日本人移住者は花卉栽培に携わっている人が多いので、その花卉栽培の組合でコンピューターの技師を求めていて、そこで働いていました。組合自体は日本人が半分、ポルトガル系が半分くらいいました。アルゼンチンの花卉協同組合だったので、日系人だけではなかったので、かなり大きな組織で 200 ～ 300 どころか、人数は沢山いました。

守屋：増山朗さんも花卉栽培に携わっていらっしゃったのでしょうか。

宮本：増山さんはもう引退していらっしゃいました。花卉協同組合に日本人の集まるグループがあり、組合の中の一部に場所を借りていました。そこで日本の文化的な活動をしようということで、日本から本を取り寄せて販売していました。そこの管理を増山さんがしていたんです。

守屋：そこで宮本さんは増山さんとお知り合いになったのですね。『巴茶媽媽』を創刊されたとき、宮本さんは 30 代半ば、増山さんは 70 歳ですよね。年齢的には、増山さんはリタイアされている年齢ですね。

宮本：アルバイトのような感じで働いていたと思います。

守屋：花卉協同組合の日本人グループで、他にも日系コミュニティとの接触などあったのでしょうか。『巴茶媽媽』では日系移民へのインタビュー記事も掲載されています。

宮本：インタビューの設定は、基本的に増山さんが行っていました。そこに同行し、インタビューした内容を私が記事に起こしていました。何回もテープを聞いて、活字にしていました。役割分担として、「グアラニーの森の物語」や小説類は増山さんが書いて、インタビューなどの記事は私が書く、という雰囲気で動いていました。

守屋：今回、増山さんの小説のもとになったと思われるメモの複写を目にしました。手書きで、ノートにびっしりと、膨大な量のメモを残

Hosei University Repository

していらっしゃいます。実際に宮本さんが受け取る原稿も手書きで渡されていたのでしょうか。

宮本：帳面に書かれていたものですね。一度ノートに書いて、それを書き直して、と何度も書き直したものを私は受け取っていました。字は綺麗でした。読めなかった文字もだいぶあり、苦労しました。例えば、「瀟々（しょうしょう）と」とかですね。昔はコンピューターといっても今のようなものではないので、漢字を探すのが大変でした。漢字辞典をいろいろ漁って。

守屋：日系移民の俳句グループなどとの接触はなかったのでしょうか。

宮本：増山さんはそういう会合にも、いろいろ呼ばれていたようです。『巴茶媽媽』の最後の方の記事に、川柳をやってみようか、ということが書かれていたと思います。俳句仲間、川柳仲間と少しは付き合いがあったと思います。私が呼ばれて行ったことは無かったですね。文学関係では、増山さんがメインの人でしたね。いろいろな団体から呼ばれては話を聞き、また、話をしていました。私は増山さんほどそういった交流は無かったです。

守屋：宮本さんは、『巴茶媽媽』創刊同人の関口さんとは研修中から交流があったと。アルゼンチンにいらしてからも交流は続いていたのですか。

宮本：かなり仲は良かったと思います。住んでいた場所も近かったです。何回か引っ越ししていますが、いつもまあ近くに住んでいました。関口さんが結婚した後も場所は近かったですね。

守屋：関口さんは、日亜学院という日本語学校の校長ですね。「海外開発青年」として来亜当時から校長だったのではないですよね。

宮本：最初は普通の教員で来亜して、1年目くらい、前の校長が辞めるタイミングで関口さんが校長に指名されたんだと思います。

守屋：宮本さんがアルゼンチンに渡ってから何年目に『巴茶媽媽』を

Hosei University Repository

作ろうという話が出るのでしょうか。創刊は1989年9月ですね。

宮本：3年目ですね。作ろうと決めて、1ヶ月くらいで記事を書いて、という感じです。創刊のきっかけも、花卉組合、ニッパル協同組合で増山さんが図書管理者のように働いていて、私も事務所が隣だったので、よく話をしていました。ちょうどそのとき関口さんも事務所に来ていて、増山さんを誘って3人で昼食を食べに出かけたのですね。その前から「グアラニーの森の物語」の原稿を見せてもらったりはしていて、その話を関口さんにしていて、それで雑誌を作ろう、という話になったと思います。

守屋：そして関口さんが、同じ日亜学院に勤めていた宮城（みやしろ）万里氏を誘って、同人5名で『巴茶媽媽』創刊に到るのですね。もう一人の創刊同人、ホルヘ・ゴンザレス氏はどういう経緯で同人になるのでしょうか。

宮本：ホルヘはニッパル協同組合に漢字辞書を買いに来たんです。それで増山さんと知り合って、しょっちゅうニッパルに入り浸っていたというか。よく増山さんのところに来ていました。増山さんは人を惹き付けるところのある方で、いろいろな人がよく来ていましたよ。曽（昭陽）さんもそういう一人で、1ヶ月に1度くらい増山さんのところに話に来て、昼食を一緒にする、という感じでした。

守屋：それで5人が集まり、『巴茶媽媽』が創刊されるのですが、同人費を集め、創刊されたのでしょうか。

宮本：最初は同人費を集めました。一人200ドルくらいじゃなかったでしょうか。広告も集めようとはしました。少しは貰っていました。地元の旅行社などから50ドルくらいは貰っていました。

守屋：最初の雑誌発行部数は多かったのでしょうか。

宮本：いや、少なかったです。200部じゃなかったかな。100部か200部です。

守屋：部数が多くなるのは4号以降でしょうか。4号からワープロの

Hosei University Repository

字体が変わり、装幀も整っていきます。

宮本：部数をある程度刷らないと、結局高くなりますから、ある程度の部数は刷ったと思います。300 ～ 400 部くらいかな。最後は 500 部刷りました。

守屋：やはり購入される方はアルゼンチン在住者が多いと思いますが、他の南米の国、あるいは中南米の国からの注文、送付されたことはあったのでしょうか。

宮本：ブラジルの本屋に置いたことはあります。5 冊とか。定期的に送る訳ではなくて、旅行に行ったついでに本屋をまわって、置かせてもらうという感じです。売れたという代金を貰ったのかどうかは覚えてないです。

川村：リベルダージに日本語の書籍を置いている本屋がありましたね。

宮本：そうです。日本人街の本屋をまわったことがあります。ブラジルでは最初に買い取ってくれたと思います。個人的にはパラグアイの知人に何冊か託したり、メキシコで交流のあった方に送ったりしました。あと、日本の本屋で、四谷の上智大学の前にあるところにも少しおいたと思います。

守屋：日本の文芸誌に、同人誌として『巴茶媽媽』を送ったことはあるのでしょうか。

宮本：おそらく増山さんが何度か送っていると思います。個人的に増山さんが送っていたと思います。

守屋：『文学界』という雑誌には「文芸同人誌評」がありましたが、そこに送っていたのでしょうか。

宮本：1 回か、2 回か。

川村：それで『文学界』に取り上げられたとか、評価などはありましたか。

宮本：無かったはずです。増山さんががっかりしていましたから。

Hosei University Repository

川村：ブラジルやアルゼンチンといった、南米で発行されている同人誌などは、めずらしいということで、比較的取り上げられることがあるのですが。

守屋：アルゼンチンの新聞、『らぷらた報知』や『アルゼンチン時報』には、『巴茶媽媽』として、文学的な関連企画などあったのでしょうか。

宮本：最初の頃は、記事として『巴茶媽媽』を取り上げたと思います。『亜国日報』ですね。

守屋：『らぷらた報知』など、俳句欄といった文芸欄がありますが、そこに投稿していた人たちからの、文芸的な接触はありましたか。

宮本：無かったと思います。ただ応援してくれる手紙や寄付はありました。

守屋：パラグアイやメキシコに雑誌を送っていたということですが、そこで雑誌を手に取った方から、自分の作品掲載の希望や、同人としての参加希望はあったのでしょうか。

宮本：無かったですね。あくまで応援の手紙で、それは何度か受け取りました。

守屋：そうですか。『巴茶媽媽』の同人は、創刊同人の５名の方たちと、途中から参加した秋月巖さんでしょうか。

宮本：ナカモト・コウゾウ。彼も途中から同人参加しましたね。画家のエレーナ・タビチーノは同人ではなかったですね。協力者でした。

守屋：何度か巻頭で作品特集を組まれていらっしゃいますね（第７号、第８号で巻頭特集として「版画集」が組まれている：注守屋）。

宮本：ええ。彼女の作品は気に入っていたので。表紙絵も彼女に頼んでいました。いつも快く作品を作ってくれました。

守屋：では、同人として参加したのは、創刊同人５名の方たちと秋月さんとナカモト・コウゾウさん。最終号時は７名の同人がいらっしゃったということでしょうか。

宮本：そうですね。最終号でいない人もいますが。

Hosei University Repository

守屋：関口さんは、途中でメキシコに移住されるのですね。同人を退かれた訳ではない…

宮本：同人を辞めるとか、特に規則も無かったですから、いつでも門戸は開いていたというか、戻ってきたらいつでも参加できる状態でありました。辞める辞めないとか、同人が誰かという意識もそんなに無かったですし。とにかく、皆で集まってやろう、という感覚でしたね。（宮城）万里さんもアルゼンチン生まれの二世なんですが、日本人と結婚して日本に行っていましたね。万里さんにとっては日本語の文章で書き続けることは、負担が大きかったかもしれません。日本語で書き続けていくことは難しい、ということを言っていました。

守屋：その中でやはり「グアラニーの森の物語」が、雑誌の大きな割合を占めていたわけですけれども、増山さんの創作意欲は衰えることなく続いていたのですね。

宮本：ええ、何度も何度も書き直すんですね。それで、最初に書いたものはダメだということになる。「グアラニーの森の物語」として書かれたものも、完結したものも読んだ記憶はあるんです。『巴茶媽媽』で続けなくても、「グアラニーの森の物語」だけは完結したいと思っていたんですね。増山さんから原稿がくれば一応仕上げて、印刷はどうかわかりませんが、インターネットで公開するとかも考えて、本人に伝えてはいたんです。しかし、増山さんに「あのままでは駄目だ」と言われたんです。確かに、書き進めているうちに、内容も大分変わってきていたんですね。最初に私が見たときと、後半は大分変わっていました。

守屋：宮本さんご自身は、翻訳を一編載せていらっしゃいますね。小説など、ご自分で創作することは考えなかったのでしょうか。

宮本：そのうち書こう、という思いだけで終わってしまいました。

守屋：やはり編集長として、編集に関わっていらっしゃる時間が多かったのですね。

Hosei University Repository

宮本：そうですね。創作をしていたら、多分編集は出来なかったと思います。関口さんにも原稿はワープロ原稿を貰っていました。ワープロを打つだけならいいのですが、それを本の形にするまでとなると、あまりやりたい人がいなかったんです。

守屋：『巴茶媽媽』が続いていくに従い、新しい書き手の発掘などはなさったのでしょうか。

宮本：そうですね。いろいろ誘って書いてもらったりはしました。

守屋：そのような人的なつながりは、まずは増山さんのところに集まってくる方にお話ししたのでしょうか。

宮本：増山さんの知り合いの移住者には、あまり書きたいという人はいなかったですね。むしろ読みたいと。自分から書いてみたいという人は、あの年代ではあまりいなかったですね。若い人たち、どちらかと言えば日本から来たばかりの人とかを誘ったり、あとは二世の人ですね。例えば関口さんの日亜学院で知り合った長嶋（典子）さんという、二世の通訳をしていた方とか、もっと書いて貰いたかったですね。いろいろな面白い話を持っていたらしいですけれども、日本語には起こせなかったので、関口さんが聞いて書いたり、スペイン語で書いてもらったものを翻訳したりとかしていました。

守屋：当時、小説に限らず『巴茶媽媽』の他に日本語同人誌はありましたでしょうか。そして雑誌同士の交流や接触はあったのでしょうか。

宮本：アルゼンチンでは無いですね。『巴茶媽媽』だけです。日本語の文章としては、各県人会の冊子は、頼まれてよく作っていたので、そういう文章はよく見かけていました。大概あの時代の雑誌は私が関わっていました。秋田県人会誌とかラ・プラタ日本人会誌とか。だから呼ばれてよく話は聞いていました。原稿を頂き、校正をし、直したりしながら本の体裁に組んで、印刷屋に持っていって、ということをしていました。本来でしたら、らぷらた報知社が昔はそういうことを全て行っていたんですが、どうも人材がいなかったようで、仕方なく

Hosei University Repository

私の所にまわってきていました。

守屋：海外開発青年として働きながら、さらにそれらの本の編集も行っていたのですか。

宮本：その時は海外開発青年の後のことです。もう独立して、一人で仕事をしているときです。

守屋：ブエノスアイレスでの日本語の出版媒体ほとんど全てに関わっていらっしゃったのですね。私がうかがいたい事として、『巴茶媽媽』で「移民史を訪ねて」という企画がございました。アルゼンチン定着移民1号の榛葉贇雄の孫であるビオレータ榛葉さんや、森田ゆくえさんにもインタビューを行っていらっしゃいます。あれらは増山さんの「グアラニーの森の物語」のヒントに確実になっていると思うのです。

宮本：先に森田さんのことを知っていたと思うんですね。それで、インタビューを企画して、聞きに行った。

川村：作品に書くための裏付けとしてですか。

宮本：面白いから記事に残しておきたかったんじゃないですかね。あれも、私も誘われて一緒にお話を聞きに行って、録音だけはして、起こす段階で止まっていたんですね。そしたら、増山さんがいつの間にか、全部作り上げていてくれたんです。他の方たちのときは、私が全部記事にしていました。森田さんのときは、私が忙しかったか何かだったと思います。あと、インタビューを聞いても、全体像が見えなかったというのはあります。

守屋：日系ブラジル移民史には必ず登場する、平野運平の平野植民地に、実際にいらっしゃった経験談ですよね。あれは南米への日系移民史としても大変貴重な資料となっていると思います。

宮本：あの時代の日本人だからでしょうか、死ぬことが全く怖くなかったと言うんですね。森田さんは10代前半の年齢だったらしいのですが、ブラジルの平野植民地ですか、そこで襲われそうな予感があったと。戦争に負けたときだったんでしょうか。現地人が敗戦国民を襲っ

Hosei University Repository

てくるということで、いつも、寝るときも短剣を離さずにいたと。そしていつでも襲ってきたら、すぐに死んでやろうと思っていたと。そして全然死ぬことは怖くなかったと言っていたのにはびっくりしました。

守屋：あと高倉謙さん、同姓同名ですがあの俳優の高倉健さんではなくて、典型的なアルゼンチンへの日系移民ですね。つまり、当時の日系移民が就いた職業をすべて経験していらっしゃるんじゃないでしょうか。洗濯屋、野菜作り、カフェ店員、タクシー運転手、お抱え運転手、ほとんど経験していらっしゃって、まさに当時の日系移民を体現していらっしゃるような方なんですね。その方にインタビューをしようというのは、増山さんがセッティングをなさっていらっしゃったのでしょうか。

宮本：セッティングはそうです。そしてお宅にうかがって、話を聞いて。まあ、一世ですから、お話をうかがうのも年齢的に最後だろうし、今後は難しいだろうからということで、増山さんがセッティングをしてくれたんですね。

守屋：『巴茶媽媽』が第4号以降、雑誌としての体裁が整って、みかけも中の活字も大変綺麗になっていきます。そして第8号までコンスタントに発行されていますが、第9号と最終号になってしまう第10号では刊行までに半年、1年と少し期間が空いています。これはどういった理由があったのでしょうか。

宮本：基本的には私が忙しかったというか、原稿が集まった段階で、増山さんの小説だけという訳にはいきませんから、インタビューの相手を捜したり、記事にまとめたりだとか、誰かから原稿をもらって活字にしたりしなければいけませんから、それが滞ったりしたからですね。私も他の仕事も忙しくなっていた、ということもありました。コンピューターの仕事をしていたので、あまり時間を取れなかった期間もあったと思います。しかし、半分以上は気力の問題だと思います。

Hosei University Repository

みんなで集まって、みんなで盛り上げて「がんばろう」となっていればもう少し続いたかもしれません。

川村：雑誌継続の経済的な問題というのはどうですか。

宮本：それもゼロではありません。一生懸命やって、いつも赤字で辛いな、という気持ちもありましたし。総合的には、ギリギリ赤字ではなかったのですけれども。

守屋：実際に雑誌が発行された後に、皆で集まって、「今月号のこの作品については、どうだ」といった、意見を述べ合う機会というのはあったのでしょうか。

川村：合評会のようなものですね。

宮本：大概は打ち上げパーティみたいな形で、よく集まってはいました。合評会まではやらなかったですね。お互いの作品の感想などは、もちろん言い合っていました。第１号、第２号の頃は、関口さんはそういうのが好きだったので、この作品のこの部分が少し、とか、今度はこれを入れよう、とかは話し合っていました。そういうのも、関口さんがいなくなって、企画に欠けていたことはありますね。

守屋：同人の皆さんの間で、その頃話題になった作家は誰かいらっしゃいましたか。

宮本：皆のなかでよく話題にしていたのは、ガルシア･マルケスとか、ボルヘスの話をよくしました。日本でも三島とか川端とか。

守屋：同時代の、「今月の雑誌に載ったこの小説は」といったような話はいかがでしたか。

宮本：その打ち上げとか、皆で集まったときにしょっちゅう話していました。芥川賞の作品については皆でよく話していましたね。他の受賞作についても。

守屋：『文芸春秋』や『文学界』はアルゼンチンに輸入されていたのですか。

宮本：ええ。お話しした、増山さんが働いていたニッパル協同組合で

Hosei University Repository

『文芸春秋』や他何冊かは取っていたので。それを移住者の人が買うんですが、そこで借りて読んでいました。皆個人的に好きでどこかから入手して読んでいた、というのが一番多いですけれど。ただ『巴茶媽媽』として、皆で何かを読もう、というのは無かったですね。でも、誰かが「これが面白い」と言えば、皆それを読んでいましたね。

守屋：その時期にブエノスアイレスでの日系コミュニティの変化などはありましたでしょうか。

宮本：『亜国日報』が終わった、というのがありました。『亜国日報』がつぶれそうな時に、関口さんと話をしたことがあるんです。関口さんはそういうところで野心家でもあり、アイデアマンでもありましたので、『亜国日報』を買おうか、と話したことがあるんです。『巴茶媽媽』で買ってしまおうか、と話したことがあるのは覚えています。

川村：そんな金銭的裏付けがあったのですか。

宮本：個人のお金で。貯金で。やっぱり止めよう、という話になったのですけれど。

守屋：先ほど、宮本さんから、高揚感の減退といったお話もありましたが、最後の方になって、増山さんに関しては、創作意欲も衰えることなく書き続けていらっしゃったようですが、他の皆さんはいかがでしたか。

宮本：最後の頃は、同人で残っていたのは、増山さんと私だけだったような気がするんですよね。秋月君も日本に戻っていた時期がありますし、ホルヘも同人としてやってくれてはいましたが、あくまでもスペイン語で、日本語で文章を書くまでにはいきませんでしたし。

守屋：かなり漢字に詳しいようですが。

宮本：漢字についてだけ書いてもらっていました。新しい書き手を「発掘」すると言っても、私は知人に書いてもらうという「発掘」しか出来ませんでしたね。関口さんがいた頃は、関口さんの方が交流が広かったです。日亜学院という場所もあったし、そこにはいろいろな人が入っ

Hosei University Repository

て来ていましたし。

守屋：今の現時点から思い返すとして、宮本さんは『巴茶媽媽』についてどのようなお考えを持っていらっしゃいますでしょうか。

宮本：何とか残したいという気持ちがあります。いつかはインターネットを通して、公開したいとは常々思ってはいるんですけれど。

川村：我々がアルゼンチンに行ったのは、チームとして日系・韓国系の移民文学を調べに行ったんです。そこで韓国・東国大学の金煥基（キム・ファンギ）さんが『異文化』（第13号）に、アルゼンチンの韓国系移民文学について書いているのですが、当時は韓国系移民の文学雑誌があることは、直接交流はなくとも、知ってはいたのですか。

宮本：いや、全く知りませんでした。韓国系移民の文芸雑誌があることも全く知りませんでした。中国系の人たちのことは、少し。知り合いもいたので。

守屋：曽（昭陽）さん。

宮本：そうですね。友達もいたので、少しは動きも知っていたのですが。韓国系の人は全く知らなかったですね。

川村：10年以上前にソウルで、世界にいる韓国人文学者が集まることがあって、私はそこにゲストで呼んでもらったことがあって、その時アルゼンチンから来た韓国系の詩人の方がいたのです。すでに結構な年齢だったのですが。そのときにお話を聞いたときに、日本の植民地時代の教育を受けたので、「私は日本語が出来る」と。だから日系人の文学団体のところで、自分の作品を載せるとか、一緒に文学をやりたいと思って、それで文学団体を訪ねたことはあるけれども、関心を示してもらえなかったので、自分たちで文学雑誌を始めた、という話を聞いたのです。ですから、そのような韓国系移民からの接触というのは、全く無かったことはないだろう、と思ったのですが。

宮本：そのような接触があれば、喜んで一緒にやれることはやったと思います。たぶん大使館関係、亜拓とかに行かれたのではないでしょ

Hosei University Repository

うか。

守屋：他の国の、例えばアルゼンチン人の文学コミュニティからの接触はどうでしたか。

宮本：『巴茶媽媽』にも載っているグディーニョ・キーフェルとか、彼はアルゼンチンの文学者でしたから。そういう誰かの知り合いで、会ったりしたことはありました。グディーニョさんは原稿だけでしたけれど。「文学者」とか、そういう、立派な方からの接触は無かったです。

守屋：『巴茶媽媽』は2冊スペイン語版で刊行されていますが、あれはアルゼンチン人にも『巴茶媽媽』を広めようという試みですよね。

宮本：アルゼンチン人に日本の文化を広めよう、という試みですね。もとはアマリア・サトウ氏がアイデアを出して始めたんですね。

守屋：内容は全く同じですか。『巴茶媽媽』そのままのスペイン語訳版でしょうか。

宮本：全然違います。内容は日本の文学紹介です。別冊の形でやろう、ということでした。

川村：『巴茶媽媽』を作っているときに、日本から文学者がアルゼンチンに来たとか、日本人文学者の講演会があったとか、そういうことはありましたか。

宮本：誰も来なかったんじゃないですかね。誰か来たと聞いたことが無いです。ブラジルには行くんですね。ブラジルにムツゴロウの畑正憲さんが来たときに私の文章を読んでくれた、というのは聞いたことがあります。ブラジルに『オーパ』という雑誌がありまして、そこに何度か掲載してたんですね。

川村：韓国系の方は、韓国から何人か著名な人が来たけれども、アルゼンチンに着いたら何も書いてくれなかった、という話を韓国系の方から聞いたことはあります。

宮本：アルゼンチンまで来るということは、どこか、国際交流基金と

Hosei University Repository

かからお金が出ないと、なかなか来ないと思うんですよね。国際交流基金ではおそらく文学者は呼ばないですね。ミュージシャンとか演芸関係の人間ですね。

川村：ブラジルだったら、岡松和夫さんという小説家がいて、『コロニア万葉集』について『異郷の歌』という小説を書いています。他には大城立裕さんという沖縄の作家が『ノロエステ鉄道』を書いたり、北杜夫さんがブラジルの日系移民を取材して『輝ける碧き空の下で』を書いています。開高健さんは、アマゾンで魚釣りをして『オーパ』を書いたりしています。それ以外にも取材のために来て、いろいろ書いている方がいるのですけれども。

宮本：最近はブエノスのことを書いている人がいたような…

川村：昔ですけれど、やなぎや・けいこさんという児童文学者がブエノスアイレスに来て、『ラ・プラタの太陽の下に』（光風社書店、1977・6）というエッセイ集を出しています。

宮本：吉本ばななが何年か前、書いていました。あれはエッセイでしたか（『不倫と南米』幻冬舎、2000・02、『アルゼンチンババア』ロッキングオン、2002・12　注守屋）。

川村：いえ、小説です。結構長い作品でした。あれはもちろん、取材のためにアルゼンチンに行ったはずですよね。ブラジルでの岡松和夫さんの場合は、サンパウロ大学や国際交流基金がお金を出して、半年とか一年呼ぶ、というシステムはあるんですよね。本来でしたら、ブエノスアイレス大学で文学者､研究者を呼んでもいいと思うんですね。

宮本：アマリア・サトウ氏が、ブエノスアイレス大学で、日本の文学者を呼ぼうとしたことはありました。

川村：今度我々も、ブエノスアイレス大学でのシンポジウムで発表させて頂くので、本日の話は参考にさせて頂きます。ブエノスアイレス大学に東洋学研究所がありまして、カロリーナ・メラ教授が中心のシンポジウムがありまして、そこで発表することになっています（2012

Hosei University Repository

年8月14日、於・ブエノスアイレス大学　International Workshop：Intercultural Communication)。そこで『巴茶媽媽』について発表させてもらおうと思っているので、『巴茶媽媽』の凱旋講演としてお話をしようと。

宮本：嬉しいことです。

(2012年5月19日、大阪府・鶴橋にて)

※宮本俊樹：1955年茨城県河内村生まれ。北海道大学数学科卒。1988年開発青年として来亜。『巴茶媽媽』編集担当（「同人紹介」『巴茶媽媽』第5号より)。現在大阪府在住。

※本インタビューは、2011年度科研費助成事業「南米日系移民および韓国系移民の文学の総合的研究」の一環として行われた。